

令和7年度 全国学力・学習状況調査の本市の状況と今後の対応

いわき市教育委員会

調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から

- 全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- 学校における児童生徒への学習指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

1 実施内容

- (1) 実施 期 日 令和7年4月17日（木）
※ 中学校理科は令和7年4月14日（月）～17日（木）
- (2) 実 施 対 象 市内小学校6年生全児童 及び 中学校3年生全生徒
- (3) 実 施 教 科 小学校：国語 算数 理科 中学校：国語 数学 理科
- (4) 実 施 校・人 数 小学校 59校 2,461名 中学校 34校 2,232名
- (5) 実 施 方 法 児童生徒質問調査及び中学校理科はコンピュータによる実施

2 平均正答率（令和4～7年度）

調査結果は学力の特定の一部であり、学校における教育活動の一側面である。

《小学校》

国 語	R4	R5	R6	R7	算 数	R4	R5	R6	R7	理 科	R4	R7
いわき市	65	67	67	66	いわき市	61	61	61	56	いわき市	62	57
福島県	64	67	66	65	福島県	61	61	60	55	福島県	62	56
全 国	65.6	67.2	67.7	66.8	全 国	63.2	62.5	63.4	58.0	全 国	63.3	57.1

《中学校》 ※令和7年度は中学校理科はIRTスコア

国 語	R4	R5	R6	R7	数 学	R4	R5	R6	R7	理 科	R4	※R7
いわき市	69	68	58	52	いわき市	46	45	49	44	いわき市	48	490
福島県	68	69	57	53	福島県	47	46	48	45	福島県	48	496
全 国	69.0	69.8	58.1	54.3	全 国	51.4	51.0	52.5	48.3	全 国	49.3	503

※ 今年度の中学校理科はIRT（項目反応理論）方式によるスコアで示される。IRTは英語資格・検定試験などで採用されているテスト理論で、異なる問題から構成される試験・調査の結果を同じものさしで比較できる。

《小学校》

- ・ 国語と理科は県平均、全国平均と概ね同程度である。
- ・ 算数は県平均と同程度、全国平均よりは、やや下回る傾向が続く。

《中学校》

- ・ 国語と数学は、概ね県平均を維持するも全国平均との差がある。
- ・ 理科は、I R Tスコアで示され、概ね県平均及び全国平均と同程度である。

3 調査結果の概況

- (1) 思考力・判断力・表現力等を問う記述式の問題など課題となる点は、全国や県と同じ傾向である。
- (2) 無解答率の状況から、解答に苦戦する児童生徒の割合が少しずつ増えてきていることがうかがえる。下位層の児童生徒に対し、学習を下支えする手立てを講じていく必要がある。
- (3) 児童生徒の状況については、学習に対して概ね肯定的に捉えており、将来の夢や目標を持っている児童生徒が多い。また、授業時間以外での学習時間は、全国よりも多い。一方、「児童生徒理解アンケート」からは小学校と中学校の接続において、「学習意欲」が低下している傾向が見られる。
- (4) 各学校における「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、児童生徒の学びの姿や児童生徒の実感として現れるように、引き続き授業の改善を進めていく必要がある。

4 今後の取組

- (1) 「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を一層進めます。
 - ① 各校の実態に応じた授業改善に向け「ダッシュボード」を活用し、組織的・計画的にエビデンスに基づく学力向上策を進めます。
 - ② 各学校の主体的な授業改善を伴走支援するとともに、効果的な学力向上の取組や授業実践を共有するなど「主体的・対話的で深い学び」の授業改善を推進します。
 - ③ 県の算数・数学の学力向上支援アドバイザーと本市学力向上アドバイザーが情報共有するなど、県と連携し、算数・数学の学力向上を支援します。
- (2) 児童生徒が意欲を持って学ぶ環境の充実を図ります。
 - ① 「学びの習慣づくり」推進事業などによる放課後学習への支援や個に応じた支援体制の充実に努めます。
 - ② キャリア教育の推進による主体的に学ぶ児童生徒を育成します。
 - ③ 学校における生成AI利活用などの多様な教育活動の研究や学習支援アプリの活用を通して、個に応じた学習環境づくりを進めます。
- (3) 地域や家庭、小中学校が連携した教育活動を推進します。
 - ① コミュニティ・スクールの導入をはじめ、小中学校の円滑な接続や連携を意識した取組を進めます。
 - ② 学校教育と地域・家庭との連携強化を図ります。

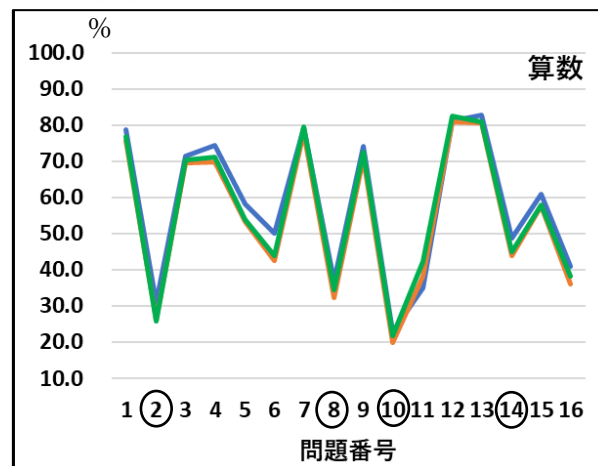
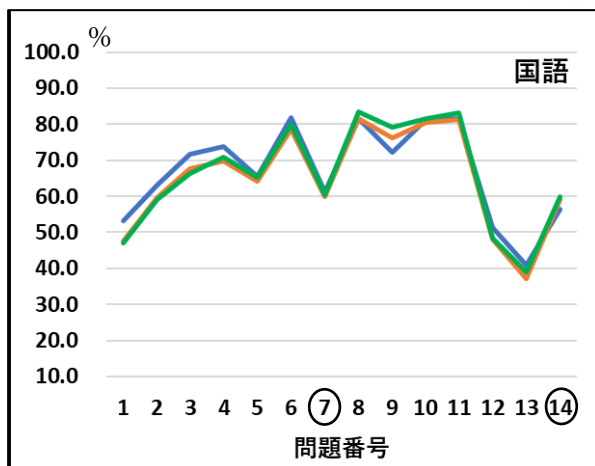
【本市の結果についての分析データ】

(1) 問題別平均正答率の状況（令和 7 年度）

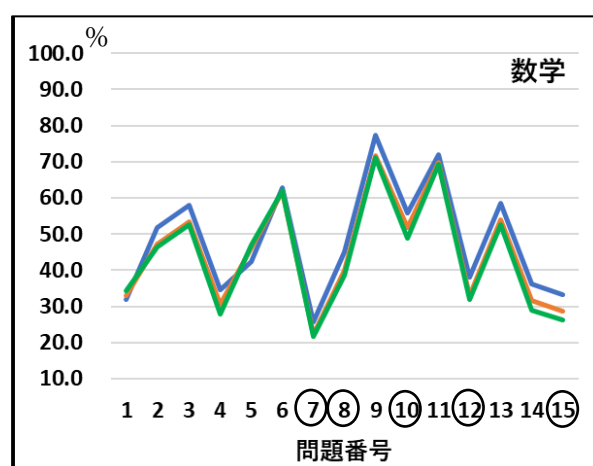
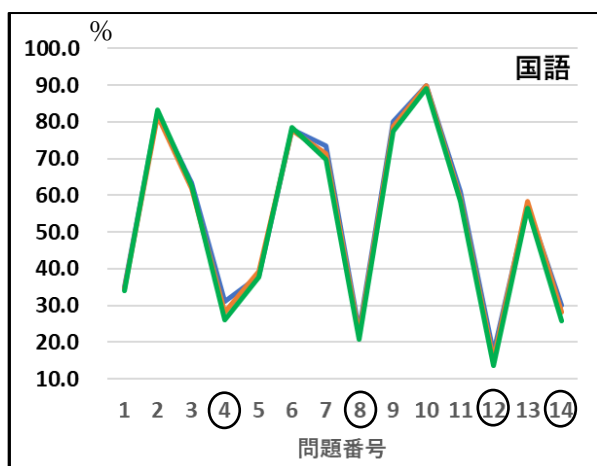
※ ○で囲まれた問題番号は、記述式の問題

《小学校》

— 全国（公立） — 福島県（公立） — いわき市（公立）



《中学校》



【ポイント(1)】

- ・ 問題別平均正答率の状況は、概ね全国や県と同様であり、その傾向に大きな差異は見られない。
- ・ 記述式の問題など課題となる問題の傾向も全国と同様である。

(2) 無解答率の状況（令和 7 年度）

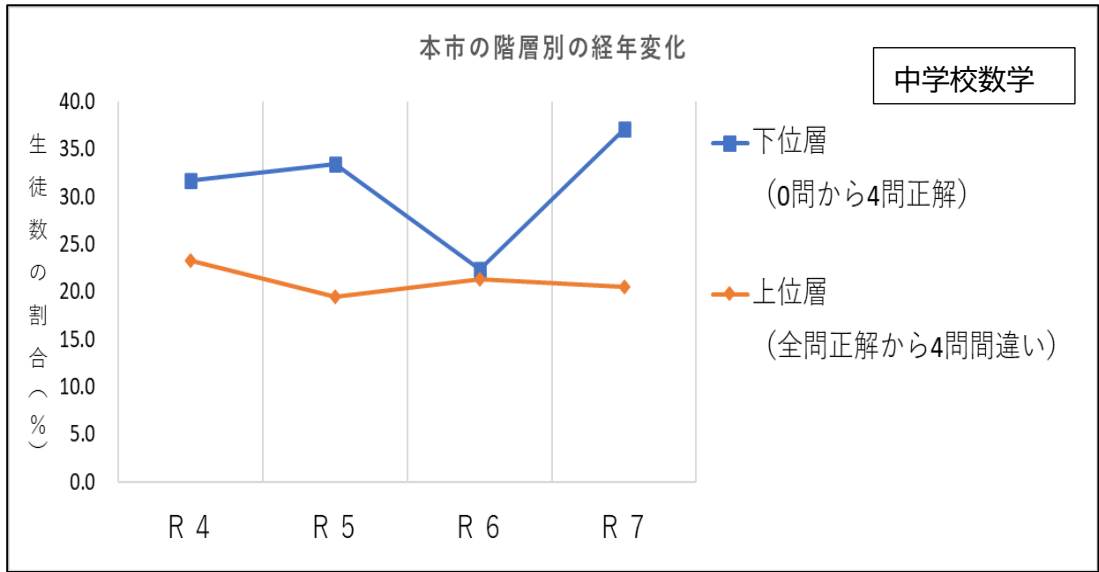
小学校	国語	算数
全国平均(%)	3.3	3.6
市平均(%)	1.7	2.3

中学校	国語	数学
全国平均(%)	6.7	10.6
市平均(%)	7.1	12.5

【ポイント(2)】

- ・ 全国と同じく小学校に比べ、中学校での無解答の割合が高くなる傾向がある。本市でも中学校において、解答できない（または、解答しない）無解答の生徒の割合が高くなっており、調査問題に対し苦戦している実態が見える。

(3) 正答数の状況（令和4～7年度）



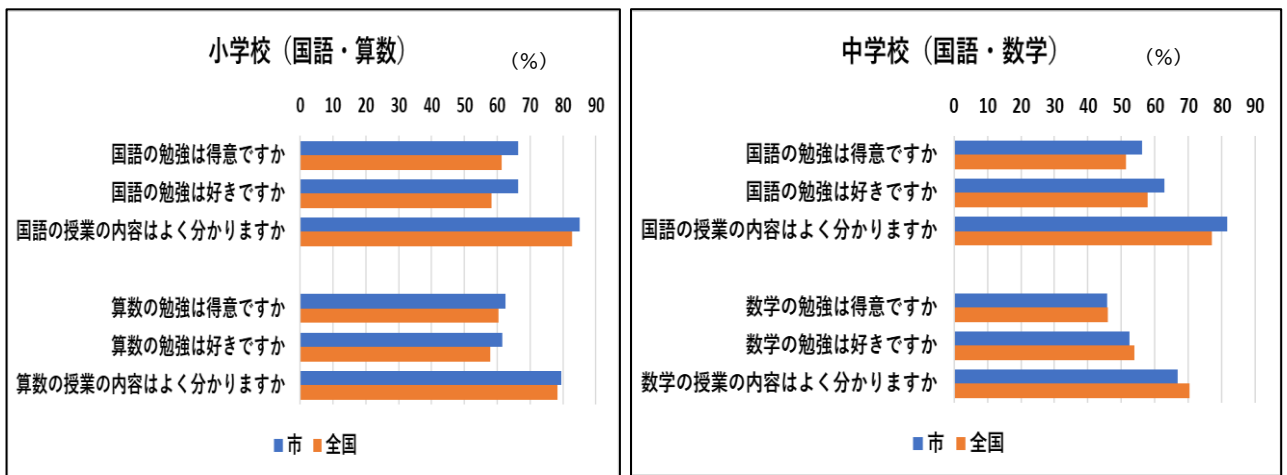
【ポイント(3)】

- ・ 上位層の割合は、経年で概ね変わらない状況で推移している。
- ・ 下位層の割合が比較的高い状態が続いており、学力の定着状況やつまづきを分析し、個に応じた指導をより一層進めていく必要がある。

(4) 児童生徒質問調査の分析Ⅰ ～児童生徒の学習に対する状況について～

① 各教科に対する児童生徒の状況（令和7年度）

肯定的な回答（「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」）の割合（％）



② 「夢や目標について」の肯定的な回答の割合（令和7年度）

肯定的な回答（「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」）の割合（％）

質問項目		小学校	中学校
将来の夢や目標を持っていますか （肯定的な回答の割合）	R7 市	84.8	71.6
	全国	83.1	67.5

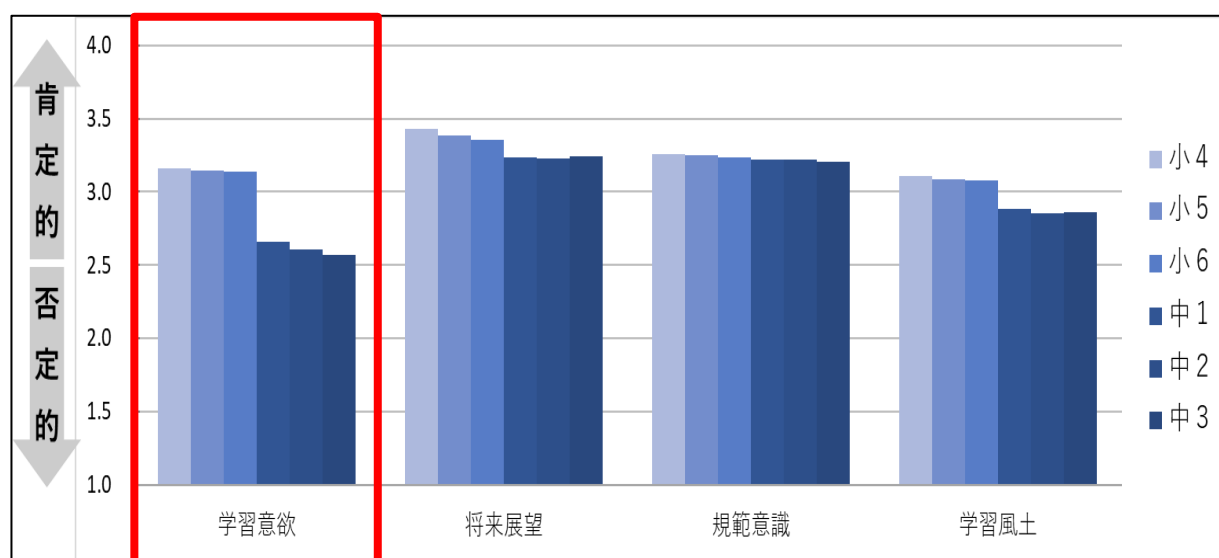
③ 学習時間の状況（令和7年度）

平日 1 時間以上学習している児童生徒の割合（％）

質問項目		選択肢		
		小学校	中学校	
学校の授業時間以外に、普段(月曜日から金曜日)、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか(学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含む)	R7	市	59.5	63.3
		全国	54.0	61.6

《参考》「児童生徒理解のためのアンケート」の結果より抜粋（令和 6 年度）

※ 学校生活の基盤構築のために行う児童生徒の非認知能力に関する本市独自のアンケート調査。小学校4年生～中学校3年生を対象に実施している。

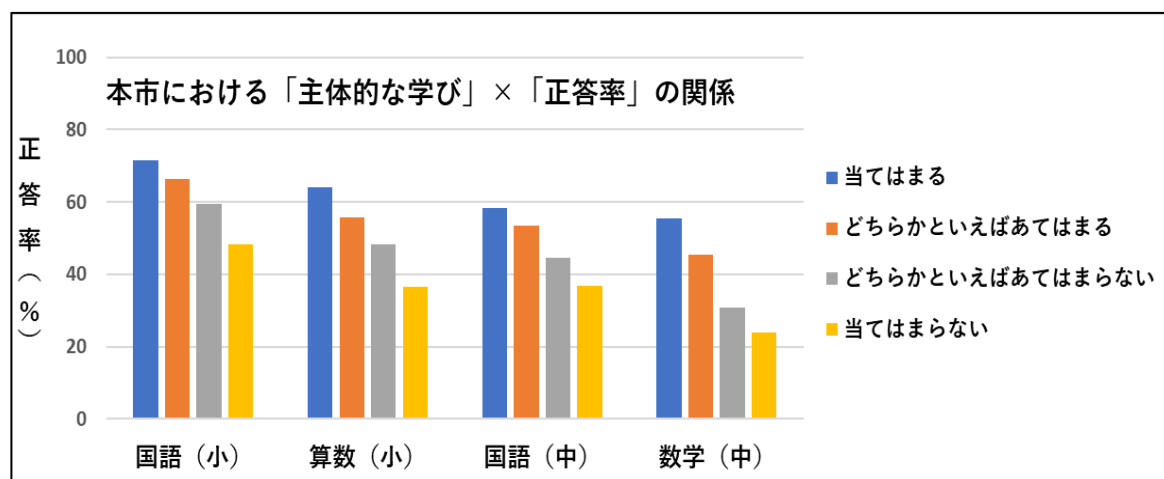


【ポイント(4)】

- ・ 全国平均と比較すると、各教科の学習は、児童生徒に肯定的に捉えられている割合が高い。
- ・ 将来の夢や目標を持っている児童生徒の割合は、全国平均より高い。
- ・ 学校の授業時間以外での学習時間は全国平均より多い。

※ 「児童生徒理解のためのアンケート」の結果では、小学校から中学校の接続段階において、特に「学習意欲」に関するポイントの大きな低下が見られる。

(5) 児童生徒質問調査の分析Ⅱ ～「主体的・対話的で深い学び」の実現された授業について～
 ① 「主体的な学び」と「正答率」の関係について（令和7年度）



- ・ 5年生までに（中学校は「1、2年生のときに」）受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか

② 「主体的・対話的で深い学び」の状況について（令和7年度）

全国平均を上回った 本市の小中学校数（割合）	小学校数（割合）	中学校数（割合）
令和7年度	26校（44.1%）	14校（41.2%）

次の「主体的・対話的で深い学び」に関する3つの質問に対し、最も肯定的な回答（「当てはまる」）とした児童生徒の割合について、全国平均を上回った学校数を算出。

5年生までに（中学校は「1、2年生のときに」）受けた授業で

- ・ 自分の考えを発表する機会が、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していたか
- ・ 課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたか
- ・ 各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っていたか

【ポイント(5)】

- ・ 児童生徒の主体的な学びの状況が良好であるほど、教科に関する調査の平均正答率が高い傾向が見られる。（理科においても同様の傾向がみられる）
- ・ 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けては、依然として課題が見られる。